

[書 評]

『文学理論の研究』を読む

(桑原武夫編, 岩波書店, 1967年)

大 浦 康 介

(京都大学人文科学研究所)

これは桑原武夫が1960年5月から66年8月まで、六年あまりにわたって組織した共同研究の報告書である(1967, 岩波書店刊)。その間、開催された研究会は計139回。桑原は序言で、一年半でまとめた『ルソー研究』(1951)の端書きで研究のスピードアップを提唱した自分が、その17年後にはかくも長期にわたる共同研究を主宰するにいたったと、複雑な胸のうちを語っている。ちなみに「文学理論の研究」は、桑原が班長をつとめたものとしては、「ルソー研究」, 「フランス百科全書の研究」, 「18世紀思想とフランス革命」, 「ブルジョワ革命の比較研究」, 「中江兆民の思想」に次ぐ、六番目の共同研究である。

文学に関する桑原の著作としてよく知られているのは、むしろ物議を醸した第二芸術論(1946)やベストセラーとなった新書『文学入門』(1950)だろう。したがって以下では、これら二書にもふれつつ、本書の大まかな内容紹介を交えながら、その特質を浮き彫りにしたい。

*

本書は五部・14論文、付論・3論文、計17論文から成っており、各部は(1)文学における価値、(2)文学的発想の原型、(3)政治と文学、(4)準拠集団としての諸民族、(5)『大菩薩峠』論と題されている。かなり

ずしも分かりやすいとはいえない部題なので、私なりにいささか乱暴に言い直せば、そこで問われているのは、(1)読者は文学の何に惹かれるのか、(2)作家は何をきっかけに創作するのか、(3)文学はいかにして政治的たりうるか、(4)文学は異文化をどのようにモデルとしてきたか、である。これらがいずれも理論構築を志向するものであるのにたいし、(5)はいわばそれを応用すべくなされたケース・スタディーだといえる。

ここでまず分かることは、本書で披露されている研究が、文学の美的側面に注目するタイプの研究のいわば対極に位置するような研究だということである(〈美〉は(1)でいう価値の一種であるが、そこでは〈美〉はまさに文学の数ある価値のなかのひとつとして付随的に扱われているにすぎない)。このことは、桑原の文学アプローチに少しでもふれたことのある者にはなんら驚くに当たらないことであるし、また桑原自身も十分意識していたことである。文学の本質を読者が作品にいただく「インタレスト」であるとした『文学入門』では、この立場は次のように弁明されている。「[……]文学に美を否定する訳ではないが、美はきわめてあいまいな言葉であり、その上、もともと造型美術の用語であるこの言葉を文学に導入することは、ややともすれば文学を、たんに

美文的な詩文、人生的意義を滅却した装飾的な文章と考えやすい傾向を生じる恐れがある。ところが文学、とくに近代散文芸術は、韻律をもたず、哲学その他の学問と同一の言語を材料とする点において、これらと密接につながり、美術や音楽とは別の芸術部門に属するものであるから、美という言葉を持ち込むことは一方的解釈におち入るおそれがあり、むしろ避けた方がよいと思われる」(岩波新書, p.13)。ここで桑原の念頭にあった文学の美的概念とは、とりわけドイツ観念論美学のそれであると思われる。日本では、戦前の岡崎義恵(東北大)にせよ、戦後の竹内敏雄(東大)にせよ、アカデミックな環境で文学理論を研究しようとした者が拠ったのはとくに美学・芸術学であり、提唱したのはドイツ系の「文芸学」だったが、『文学理論の研究』に彼らへの言及がいっさい見られないことは、桑原の立脚点を考えるうえで示唆的である。

このこととも関係していることだが、先の引用文にも見られるように、桑原は明らかに詩よりも散文、とりわけ小説を重視している。この小説重視も、文学を言語を媒介するものとして哲学と比べる視点も、じつは本書第一部の巻頭論文、桑原武夫・作田啓一・橋本峰雄「文学価値論」で表明されているところである(ちなみに本書で桑原自身が執筆にかかわった論文はこれだけである)。「言語を媒体とする文学は、他の諸芸術に比べると、直接的に感覚を刺激して快感をあたえるところが少なく、抽象的思想性を多分にもつ点において、芸術の異端ともいべき面をもっている。そして現代の文学、とくにその代表とみなされる小説は、人間文化において、かつての哲学がもったのと同じ位置と役割をもっているようにみえる。この世界はどのようなものであるか、そして何が善であり、人間はいかに生きるべきか、という探求をおこない、存在と善とを統一しようとする努力が哲学であったが、今日の文学は、より具象的にではあるが、これと類型的に同じ役割をはたしているのでは

ないか」(p.2)。

桑原が文学の美学的アプローチに対置していたのは、おそらく社会学的(彼のいう「文芸社会学」の)アプローチである。そしてそのベースに(これも乱暴な単純化をするなら)思想表現としての文学の概念があったのだといえる。桑原にとっては、小説と哲学のあいだの距離よりも、詩(「美文」)と小説のあいだの距離の方が大きかったともいえるかもしれない。こうした傾向に、桑原が長年従事してきたフランス18世紀の啓蒙思想の研究が強く作用していることも疑いを容れないだろう。

桑原は、驚くほど早い時期から、文学をコミュニケーションの一種と捉えていた。「国語改良派」を自任していた桑原が小泉信三を批判して書いた「みんなの日本語」という文章(『文藝春秋』1953年4月号)のなかに次のような一節が見える。「私の意見はコミュニケーション、つまり国語の社会的作用の面に力点を置きすぎる、といわれるかもしれない。いかにも人間は理性のみで生きるものではなく、感情の生活をもっている。政治経済や科学のほかに芸術がある。そして言語の芸術的な働きが文学であることはいうまでもない。そして私は文学研究を本務とするものであって、文学を愛することにおいて人後におちるとは思っていない。にもかかわらず、直接文学のことに言及しなかったのは、文学そのものがコミュニケーションの一種に他ならぬからでもあるが、従来国語問題について議論される方々が、ほとんど常にもっぱら美的な立場から問題を取り上げられることが多すぎたからである。文学は尊重せねばならぬ。しかし、高級な文学に無縁な人々(それがいかに多いことであろう!)をも含めて日本民族全体の生活の方が、より一そう尊重されねばならぬ、というのが私の真情だからである」(『第二芸術』講談社学術文庫, p.86)。

この時期に「コミュニケーション」というタームで文学を語ることの新鮮さとある種の風通しのよさは想像に難くない。こうした姿

勢は、概して、文学固有とされる言語や形式そのものへの無関心をともなうが、本書でも言語の問題はわずかに竹内成明の「文学の言語」で扱われているだけである（しかも巻末の「付論」に入れられている論文である）。いや、そこですら、扱われているのが言語プロパーの問題であるかどうかは疑わしい。この論文は、オグデン & リチャーズや S. K. ランガーを参照しながら、日常言語との対比において文学言語を定義しようとしたものだが、竹内は詩ではなく散文（小説）の言語を対象として、その日常言語や科学言語との違いを「言語主体の統合意識の違い」であるとし、そのうえで次のように結論づけている。「文学の表現もまた、何ごとかを指示しなければならないものであるかぎり、科学と同じように、自然、社会、歴史、あるいは人間の生態や心理等々を、対象領域としてもつことを妨げない。しかし文学表現においては、文章の意味が検証可能であるべき理由もなければ、また伝達の受け手集団〔＝読者〕が不特定多数であるため、協約が成立しうるような伝達の場合も存在しない。その点では、文学者の統合意識は自由であり、あくまで主体的なものであるということができようであろう。いいかえれば、それは、現実によっても、受け手によっても、束縛されるものではない」（p. 287）。竹内は、この統合意識が自由で（現実からも読者からも独立して）主体的であるということをさまざまに言い換えているが（文学はわれわれが「現実を事実にしてではなく、心の動きに即してとらえようとする」傾向の現れであるとも述べている）、用語は今日から見るとあいまいで、要点も見えにくい。文学の言説はすぐれて主観的な言説だと言っているにすぎないのではとも感じられる。この方向で十分な理論展開を期すなら、フィクション論に踏み込む必要があるだろうと私などは思うのだが、どうだろうか。

＊

本書の目次に戻ろう。先に各部のタイトル

を私なりに問いの形で言い換えたが、むしろこのような言い換えは単純にすぎる。本書には、これらの問題設定のうえに、さまざまな視点やアプローチが交差している。そのひとつが比較文化論的視点である。第一部に収められた加藤秀俊の「小説の比較価値論」などは好例だろう。小説という文学ジャンルは世界でも極東と極西だけに成立したというアメリカの文化人類学者 A. クローバーの指摘から出発して、登場人物のレベルでも、読者のレベルでも〈個人〉に重きをおく近代小説が、否定し、超えるべきものとしての〈家族〉とどう向き合い、格闘したかを、西欧、中国、日本を比較しながら論じたものだ（分析対象とされている作品は『デイヴィッド・コパーフィールド』、『ジャン・クリストフ』、『長安城中の少年』、『暗夜行路』、『和解』、『明暗』などである）。加藤はそこで、日本文学における父子間の「和解」のモチーフの重要性を指摘しつつ、日本ではエディプス・コンプレックスの「形成がゆるやか」であり、その結果、「日本の小説では家族の超克がきわめてむづかしい」と結んでいる。

じつは、本書所収の論文の多くは、西洋や中国との比較にもとづく（あるいは少なくとも西洋の理論を下敷きにした）日本文学論ないし日本文化論といった趣きを呈している。まず、第二部に収められた論文すべて——杉本秀太郎『植物的なもの——文学と文様』、山田稔『鳥獣虫魚の文学』、梅原猛『浄という価値』、作田啓一・多田道太郎『羞恥と芸術』——についてそれはいえる。杉本論文は、日本文学における植物の表象をつうじた感情表現（たとえば「情念を花にたとえる」こと）の系譜をたどったものだ。注意すべきは、ここでは「植物的なもの」じたいが「感情のカテゴリー」とされているという点である。桑原も序文で「感情の構造」という言葉を使っている。第二部所収の諸論文の目的を「日本民族という集団の感情構造の（文学を媒介とする）分析」と定義しているのである。感情を「か

たち」と不可分のものとみるこの見方には、『形の生命』のアンリ・フォションの影響を指摘することもできよう（杉本は周知のようにこの著書を翻訳することになる）。いずれにしても、杉本はここで『古今集』を伝統的な「感情シンボルの母体」と規定し、宗達が「草花模様」をもってこの「古今的感情」を視覚化したと説いたうえで、近代文学におけるこの伝統の行方を、子規（『歌よみに与ふる書』）、伊藤左千夫（『野菊の墓』）、漱石（『それから』）に追っている。古今の作歌を否定した子規においては、「植物的なもの」は文様に固有の多義性を禁圧され、写生の対象としての植物が人間対自然の一項として加入してくる」（p. 53）が、子規の弟子、伊藤左千夫は「逃げの一手」を打ち、ただ小説においてのみ「想いを花に託す」というようなことをした。また漱石においては「植物的なもの」は「草花模様」から離脱してそれ自体一つの価値にまで昇華している」（p. 58）。杉本はそういう言い方はしていないが、ここに西洋化のひとつの徴標をみることは可能だろう。

山田論文は、植物ではなく小動物の欧米と日本の文学における用いられ方、ひいてはその文化的背景を探ろうとしたものである。欧米においては、人間と動物が峻別され、動物はむしろ人間の悲惨を描くのに用いられるのにたいし、日本では、「アニミズム的心性」も手伝って、「とくに志賀直哉から尾崎一雄にいたる心境小説には、人間と鳥獣虫魚をおなじ生きものとみなす思考様式が明確に指摘しうる。ここでは人間は虫けらに「転落」するのではなく、虫けらと「和解」するのだ」（p. 76-77）。山田は、欧米人の小動物にたいする態度を「行動的ニヒリズム」と、また日本人のそれを「静的ニヒリズム」と呼んでいる。

梅原論文と作田・多田論文は、桑原的にいえば、自然（動植物）ではなく〈浄〉や〈羞恥〉といった感情そのものを扱ったものだといえる。梅原は、〈浄〉の起源を『古事記』と『祝

詞』に求め、宣長にならって日本の伝統的精神を浄穢の価値を中心におく価値観に認めつつも、それは古代や神道に特有のものではなく、仏教伝来後も変容しながら残存したと説く。「〔密教において〕恐らく浄穢という価値の内容の変化があったにちがいない。穢はここでは単なるけがれではなく、人間の内面にひそむ煩惱によるものとされ、穢からの回復も、禊ぎ祓いから懺悔にかわる。そして浄も、あの一すじの川の水の清い流れのような浄から、むしろ濁水ものみこむ深い宏大な海の清らかさに変るのである」（p. 85）。そして、こうした認識を踏まえたうえで、『源氏物語』と世阿弥の能作品、さらには漱石と藤村の文学を分析している。

作田・多田論文は、いわゆる〈恥〉とは区別される〈羞恥〉の感情の文学上の現われを、竹久夢二、嘉村儀多、太宰治の作品をつうじて検証したものである。著者らによれば、日本の社会は、中間集団（地域共同体、家族等）の自立性の弱さなどから、もともと「文化型」としての羞恥を生みやすい条件をそなえていたが、それが顕著となるのは大衆社会状況が生まれる大正期以降である。「敗残の美学」に執着し、「たえず身辺に漂泊の情趣をただよわせていた」竹久夢二は、日本最初の「羞恥の芸術家」だったが、嘉村儀多は「もっともラジカルな仕方では自己の劣位を追求」し、そうすることで「羞恥の限界までゆこうとした」作家だった。一方、いかなる集団にも拠らず、受動性に徹した太宰治の羞恥はいわば「羞恥の理念型」だった。

比較文化論ないし日本文化論の側面は第三部「政治と文学」所収の論文にも不在ではない。たとえば高橋和巳の「知識人の苦悩——漱石の『それから』について」は、ロシア、日本、中国の近代文学にみられる知識人像の比較の地平をまず設定したうえで、日本の場合、それはロシア文学にみられるような職業的知識人＝専門家ではなく非活動的な教養人タイプであるとして、その嚆矢を漱石の『そ

れから』の主人公・代助が体現する「高等遊民」に認め、さらにその大正、昭和における展開を長与善郎や伊藤整の作品に追ったものである。高橋は、漱石にみられ、後代の作家には受け継がれなかった「屈折」あるいは「痛み」を強調する。「〔……〕漱石の創造した〈高等遊民〉には、〔……〕後年の白樺派の教養主義にはない、ある〈痛み〉がこめられていると感じられる。社会問題や政策上の問題に無関心なのではなくて、関心があるゆえに、むしろそれと拮抗的に高等遊民たる主人公を造型したのである。はっきり言えば、明治の資本主義及び官僚主義に対する反抗として長井代助を創り出し、その運命を破滅的な悲劇の中においたのである」(p.145)。

高橋論文がすぐれた漱石論でもあるゆえんだが、第三部にはじつは作家論ないし作品論と目しうる論文が少なくない。いずれも日本文学に属する作家ないし作品である。松田道雄「社会主義小説の濫觴——木下尚江について」は、タイトルからも分かるように一種の作家論である。革命家、作家、ついで神秘家であった木下尚江のたどった軌跡をあとづけるとともに、そこに働くメカニズムを、政治的人間に関するハロルド・ラスウェルの精神病理学的考察などを参考にしながら解明している。また飛鳥井雅道「民族主義と社会主義——火野葦平のばあい」は、日本のプロレタリア文学との関係においてとらえた戦争文学論であるが、「兵隊作家」火野葦平についてのモノグラフといった側面も大きい。文壇の一部の論争を暗黙の前提とするこの種の論文が『文学理論の研究』に収められていることには、正直なところ違和感を禁じえない。もっとも、上山春平の「集団価値否定の系譜——私小説論の一視点」のような、小説の一潮流を扱った論文もある。これは、従来つとに政治性・社会性の欠如が指摘されてきた私小説を思想史の観点から見直そうとする試みで、上山は、志賀直哉と小林秀雄の言説の分析をつうじて、私小説における集団的価値の

否定は「少なくとも間接的には、新しい集団的価値の形成に寄与するという一種の政治的な役割を果たしているのではないか」と指摘している。

第四部は「準拠集団としての諸民族」と題されているが、今でいえば異文化理解、異文化交渉の問題に近いといえるだろう。諸文化の比較ではなく、諸文化間の相互関係（支配・影響等）の研究である。ただし主体側に置かれているのはつねに日本人および日本文化である。したがって、異文化との関係をとおして見た日本文化の研究だといえなくもない。編者の桑原は第二部を「文学への社会学的接近」と概括しているが、私にはむしろこの第四部こそ社会学的なのではないかと感じられる。「準拠集団」とは、H. ハイマンやR.K. マートンが用いた社会学ないし社会心理学の概念である。家族、友人から国家、民族まで、さまざまにありうる準拠集団を、ここでは民族のレベルに絞り、日本人の異民族への「準拠」のしかたを文学をつうじて探っている。鶴見俊輔「朝鮮人の登場する小説」は、そのような小説が第二次大戦後までほとんど存在しない——つまり日本人にとって朝鮮人は、明治以来、欧米人のような準拠集団ではなかった——という事実を指摘したうえで、1950年代以降の井上光晴、開高健、大江健三郎、小松左京らの朝鮮人を扱った小説は、従来の「準拠」とは異なる、民族間の新たな「役割交換」の可能性を開くものだといっている。

西川長夫「日本におけるフランス——マチネ・ポエティック論」は、近代日本の欧化主義の歴史における準拠枠としてのフランスの位置を確認するとともに、1940年代の「マチネ・ポエティック」と呼ばれる文学運動にとってのフランスの意味を問うたものである。西川は、「マチネ」は「天皇制ファシズムの荒れ狂う封建的前近代社会」としての日本の現実に、「個人主義と民主主義の近代社会」たる理想のフランスを対置したが、現実的根

抛をもたない彼らの西欧は「高踏的で通俗的な擬西欧」でしかなかったと説いたあとで、「しかし「西欧」は「擬西欧」を媒介として現実に根をおろしていく」と付け加える。「欧化主義の情熱は、西欧のある程度の理解を前提としているが、同時にある程度の錯覚を必要としている。欧化主義の情熱はまた日本の現実におけるある程度の西欧的要素の存在を前提としているが、同時に「西欧」と「日本」の落差をエネルギー源としている。従って西欧理解と日本の欧化が進行するにつれて欧化主義の情熱は衰退すべき性質のものである」(p. 240)。けだし卓見というべきである。第四部のもうひとつの論文、荒井健『二つの鲁迅像——竹内好と太宰治のぼあい』は、少し趣を異にしている。これは、タイトルにあるとおり、竹内好の『鲁迅』と太宰治の『惜別』にみられる二つの鲁迅像の比較である。太宰の描いた鲁迅は、竹内が鲁迅のうちに看破した「民族的贖罪感」を欠いている点で誤解の産物でしかないが、逆に竹内が否定した阿Qの延長上で(阿Qが体现する「民魂」との関係において)鲁迅を考える可能性を示しているのではないかと荒井は主張している。

*

このように『文学理論の研究』第一～四部は大きくって日本文化論的である。であればこそ、第五部の『『大菩薩峠』論——一つの総合の試み』において、橋本峰雄は、本書の各論文の成果を活かしつつ、ある意味できわめて日本的なこの小説を分析することができた(あるいはできると考えた)のだった。これにたいして、「付論」に所収の論文——先にふれた竹内論文、牧康夫「共感とイメージネーション——心理学的生物学的考察」、藤岡喜愛・樋口謹一「文学経験とパーソナリティー」——は一般理論的である。牧論文は、小説読者の感動は作中人物への共感(エンパシー)に支えられているとしたうえで、小説

読みの共感が心理学者の観察する共感(「運動的共感」とどう違うかを、フロイト理論などを援用しながら追究したものである。藤岡・樋口論文は、文学が読者のパーソナリティーにたいして及ぼす影響を、一定数の学生を対象として、アンケートや心理テストの形で調査したものだ。じつは狭義の「文学理論」に属するのは、これら「付論」所収の論文に巻頭の「文学価値論」を加えた都合四論文だといっていいただろう(いずれも文学を受容の側から問題にしている点は留意されていい)。しかし読んで圧倒的に面白いのは加藤秀俊や高橋和己や鶴見俊輔の論文である。この皮肉な結果に、文学理論というディシプリンの宿命のようなものを感じるのは私だけだろうか。桑原は序言で「文学研究における理論構築がいかに困難なものであるかをあらためて痛感させられた」と述べているが、言外に述べられているのは案外そのような事情なのかもしれない。

「文学価値論」をはじめ、複数著者による共同執筆論文が三本もあるのは興味ぶかい。今日であればちょっと考えられないことだ。こと研究に関するかぎり、個人の独創というようなものをあまり信じないというのが「桑原流」だったのだらうと推測される。もうひとつ「桑原流」だと思われるのは、「文学価値論」や「文学経験とパーソナリティー」に見られるようなアンケート調査の重用である。およそ「高貴」な文学を論じるのにふさわしくないと思われても不思議ではない手法であるが、思えば桑原は「第二芸術」でも、『宮本武蔵』と日本人』(1964)でもこれを用いている(後者は「大衆文化研究グループ」による共同研究である)。文学をけっして聖域とは考えない、あくまでプラグマティックかつデモクラティックな桑原武夫の面目躍如というべきか。もちろん中里介山や吉川英治といった「大衆作家」の選択にもそれはうかがわれる。このへんにも「風通しのよさ」の理由がありそうである。